

核のゴミ施設に揺れる 酪農郷で育つ活性化の芽



道北の幌延町が高レベル核廃棄物施設の誘致に乗り出しており、10年。国の無定見な原子力政策に翻弄されるなかで、酪農を基幹産業にする周辺の町では、「核に頼らない地域づくり」の芽が着実に育つ。

風評被害を懸念する農民

日本海の彼方に利尻富士の美しい山容を望む、酪農と漁業を基幹産業にする天塩町。10年前に隣の幌延町で、動力炉・核燃料開発事業団(動燃)による高レベル核廃棄物施設「貯蔵工学センター」の立地計画が持ち上がりつてからというものは、ここは推進・反対の攻防劇の舞台となってきた。

の回答が寄せられたが、「買わない」とした人が85%もいた。

「この地域は、除草剤を撒いて作るデントコーン(青刈りトウモロコシ)は少ないし、牧草畑には農薬を使っていない。道内でも一番安全な酪農をやっているんだよ。牛乳の細菌数などを減らし、酪農家が(生産量の)自主規制やペナルティーを払ってまで、消費者の意向に沿うように努力している。その時代に、幌延に廃棄物施設を造ったらどうなるのか。その判断もつかないのか、と言いたい」

住民グループ代表で天塩開拓農協の

理事歴も長い横溝幸平さん(63)は、こう力説する。消費者アンケートの結果は、「駄目だという確実な証拠」などと強調していた。

泊原発の試運転と前後して、岩内町内の乳業会社に製品の取引中止の申し出が相次いだことがある。原発操業によって購入が敬遠されたらしい。この会社はその後、近隣の町に牛乳製造工場を移転させたが、そこにも原発の暗い影が見え隠れする。風評による農畜産物への影響を物語る話である。こうした経験を伝え聞く酪農民のなかに、核廃棄施設への不安感が広がっているのは、ごく自然な反応なのだろう。

「保養里親」に広がる共感

「保養里親」に広がる共感

まだかな宗谷丘陵に牧草地やカラマツ林が広がる豊富町福永地区に、久世薰嗣(50)共美(39)さん夫婦が暮らす「エベコロベツ農場」がある。

89年春、中国山地の過疎の村から新規入植した。この地を選んだのは、水と森に恵まれたところで動物を育て、土に根ざした暮らしがしたかったのと、子供たちの将来を考えたからだ。



周辺町村は核廃棄物施設の誘致に冷やか。「反対」を意味表示する豊富町農協の事務所

ジダウンになり、風評被害が出てくるだろう。プラス要因は全くない」

と、同協議会の事務局長をしている鎌田芳則天塩開拓農協事が、酪農に心になって、全町的な農業団体の反対協議会が結成されている。

「このあたりで生産された牛乳は、すべて雪印乳業の幌延工場に集まる。安心が危険なのか立証されていないし、施設がくることによって酪農のイメー

ジダウンになり、風評被害が出てくるだろう。プラス要因は全くない」と、同協議会の事務局長をしている鎌田芳則天塩開拓農協事が、酪農に心になって、全町的な農業団体の反対協議会が結成されている。

「このあたりで生産された牛乳は、すべて雪印乳業の幌延工場に集まる。安心が危険なのか立証されていないし、施設がくることによって酪農のイメー

ジダウンになり、風評被害が出てくるだろう。プラス要因は全くない」と、同協議会の事務局長をしている鎌田芳則天塩開拓農協事が、酪農に心になって、全町的な農業団体の反対協議会が結成されている。

「このあたりで生産された牛乳は、すべて雪印乳業の幌延工場に集まる。安心が危険なのか立証されていないし、施設がくることによって酪農のイメー

ジダウンになり、風評被害が出てくるだろう。プラス要因は全くない」と、同協議会の事務局長をしている鎌田芳則天塩開拓農協事が、酪農に心になって、全町的な農業団体の反対協議会が結成されている。

「このあたりで生産された牛乳は、すべて雪印乳業の幌延工場に集まる。安心が危険なのか立証されていないし、施設がくることによって酪農のイメー



関西から山村留学にやってきた一家と話す渡辺さん(左端)



この次にミンチとなる愛牛にエサを与える丹野さん



昨年夏、ベラルーシから保養に訪れた子供(中央の2人)と久世さん夫婦(右側)ら

祖父の代から酪農を営み、個体改良を熱心にすこめてきた。牛舎には各種共進会の賞状、自宅の居間にはトロフィーが所狭しと並ぶ。

「自然が豊富にあることの良さを生かした過疎対策をやつていけば、幌延のように廃棄物施設を誘致しなくとも、自然と人間が共存できる」

というのを渡辺さんの持論。幌延町の酪農家には誘致賛成の人もいるが、人間関係のしがらみがあるからで、信念をもつて賛成しているんじゃない。

内心は僕らとそう違っていない」

と分析してみせる。

ファームインや豊富牛乳の販路拡大、チーズ加工などと、さまざまな分野を考えたい」(糞堆さん)と、他力本願ではない地域づくりを実践しようとしていた。

核に頼らず農村を活性化

貯蔵工学センター予定地から直線距離で約6kmのところで暮らす、天塩町タツネウシの渡辺修勝さん(42)は乳牛約150頭を飼う中堅酪農家である。

購入するシステムをつくった。販売は天塩開拓農協、企画運営は両団体が担当している。

同町内には約1万5千頭の乳牛があり、年間約1800頭が廃用牛になるが、輸入自由化の影響で価格が低迷して苦境がつづいている。酪農家側には加工で何か活路を見いだしたい気持ちが、消費者側には「廃棄物施設によつて道北の土と水が汚されるのは、都市の食卓が汚染されること。地元の人と一緒に立地計画をはねのけたい」との思いがあつた。昨年冬の話し合いのなかで、手始めとしてミンチ加工の試み

が浮上してきたらしい。

それから1年あまり、ずぶの素人が手がける産直事業なだけに、エサの内容で安全性議論を交わしたり、加工上のトラブルや配送の手違いなどもあって、決して順風満帆の歩みではなかつたようだが、最近は品質も安定して軌道に乗りつつある。農畜産物の加工部門では初めて、このミンチ製品が天塩町の奨励品に指定されて、会員たちは

がるの、今後は限られたルートだけじゃなく、新たな展開を考えたい。次々と新製品ができるといいね」

乳牛80頭ほどを飼う会長の丹野さんは、「ミンチ販売は緊張感があるし、いい刺激になつていて。もう少し販売量が増えると会員の経済アップにもつながるなんじゃないか」と話すのは、同世代会のメンバーで札幌市豊平区に住む細谷洋子さん。2月には天塩を訪れて、交流会を開いたとか。代表の岡本さんは、「道は長いな、という感じですが、肉を通じて精神面だけではないつながりが生まれていると思う。幌延計画に反対しつづける一つの方法になつていて、この企画を通じて天塩の人たちが消費者と提携するノウハウを見いだしてくれるとうれしい」と、「顔の見える関係」が持続するよう期待を寄せる。反対運動が縁で始まつたこの計画、事業として自立するに

がるので、今後は限られたルートだけじゃなく、新たな展開を考えたい。次々と新製品ができるといいね」

目前の過疎対策に知恵を

貯蔵工学センター計画が浮上してから10年、「過疎脱却」を旗印に国を頼つていつた幌延町をよそに、周辺の町には反対・慎重論が根強く、道も反対姿勢を崩していない。誘致運動に血道をあげた分だけ、同町はほかの地域づくりで遅れをとつた観は否めない。

1994.6.

THE HOPPO JOURNAL

校存続と地域の活性化を目指して、住宅・菜園の無償提供や生活費などの助成策など道内でも有数の優遇措置を講じて、住民の願いに応えていた。

その結果、昨年は全国各地から6家族26人が新町民になっている。本年度は、4家族20数人が地域で暮らす。幌萌小では、児童8人のうち地元出身の子は2人だけ。最近、町が移住者用に新築した「ニューカントリーハウス」(木造2階建て100m²)。5年間無償で貸与)の第1号が幌萌小の近くに完成した。山村留学をきっかけに、「自然を題材にした農村活性化」(渡辺さん)と少しずつ具体化してきた。

いま、渡辺さんはヘルパー会社の表として奔走してきた。91年春、地元の幌萌小学校の児童数がわずか2人となりそうになり、里親制度の導入から始まつた。地元の拠り所である学校が活性づけば、おのずと地域が活性化していく(渡辺さん)という思いからである。

翌年からは親子留学を呼びかけた。過疎化を防ぐために、天塩町では小学校の統廃合を避けてきた経過がある。町内には9つの小学校があるが、大半は児童数10人未満の超ミニ校。町も学

1994.6.

THE HOPPO JOURNAL

設置構想を練っている。

天塩町の酪農家が月1~2回の休日を取るには、30人ほどヘルパー雇用する必要があるが、うち20人を家族世帯、残りを未婚の女性に働いてもらう。酪農経営を志す人には自立してもらい、女性が希望するなら農村青年と結婚するのもいい。山村留学でこの地域の良さを知つた人にも働いてもらいたい——こんな構想である。

1994.6.

THE HOPPO JOURNAL

「ミンチ計画」で産消提携

貯蔵工学センターの反対運動がきっかけになって、天塩町の酪農家9戸でつくる経産牛肥育研究会(岡本満喜子代表)が、「まるごとミンチ計画」と銘打ち、牛肉の産直に取り組んでいる。

年間6回ほど、天塩町円山・東産士地区の反対派農家が育てた牛が2~3頭ずつ処理される。各部位をすべて混ぜて地元の食肉センターでミンチに加工して、500gパック詰めにしたものを札幌や釧路などの約800世帯が

1994.6.

THE HOPPO JOURNAL

「軌道に乗れば100~150人の人口増は簡単。我々には自然を相手にする知恵があるし、都会からくる人たちとの交流は地域の産業にゆとりをもたらしてくれる。『廃棄物施設で活性化』と言う前に、視点を変えてみると、まだ可能性がありますよ」

こう言って、渡辺さんは自信をのぞかせる。山村留学を受け入れた実績をもとに、町も協力して、自前の地域づくりの芽が着実に育っている。

1994.6.

THE HOPPO JOURNAL

「軌道に乗れば100~150人の人口増は簡単。我々には自然を相手にする知恵があるし、都会からくる人たちとの交流は地域の産業にゆとりをもたらしてくれる。『廃棄物施設で活性化』と言つてみると、視点を変えてみると、まだ可能性がありますよ」

こう言って、渡辺さんは自信をのぞかせる。山村留学を受け入れた実績をもとに、町も協力して、自前の地域づくりの芽が着実に育っている。

1994.6.

THE HOPPO JOURNAL

<p